

寒さのせい、虫の音色も聞こえてこないしんと静まり返った夜、ガタン、という音と共に窓から顔を覗かせたその男に、そろそろ就寝しようとしていたロンクーは顔を顰めた。こうやって訪ねて来た事は一度ではないとは言えちやんとドアから入って来いと言いたくなるが、ロンクーの口からは別の言葉が出た。

「どこで、何をしてきた」

この部屋の主であるロンクーには、そう問う権利がある。しかし客人は答えもせずに、無遠慮に窓からそこそこ大きな体を部屋の中に滑り込ませてきて、彼は眉間の皺を一層深くした。客人の無神経で唐突な来訪を不快に思った訳ではない。そのおいに顔を顰めたのだ。

「風呂」

「何……う？」

「だーから、風呂」

やっと口を開いたかと思えば、ロンクーが考えていた事をぼそりと呟き、客人は——グレゴは無造作に剣をゴトンと床に落として首の関節を鳴らした。まだ身を切る程の寒さの季節ではないが、外の気温の割には軽装である辺り、どこかで何かをしてきた事はすぐに分かった。…否、見た目で分かるというより、矢張り彼からのそのおいで分かった。

「洗ってくれるんだろ、頭の手洗から爪先まで。このままじゃこの城からおん出されちまうしなあ」

挑発する様な表情で言うグレゴに、ロンクーは矢張り苦虫を噛み潰した様な顔で溜息を吐く。この男はいつだってこうなのだ。こちらの都合など全く考えず、自分のやりたい様に、我儘ばかりを口にする。そしてロンクーがそれを聞き届けなるとは微塵も思わないのだ。全て聞き届けてきた自分が悪いのだとロンクーも自覚している分、尚の事顰めっ面になってしまふ。睨む様にグレゴを見た彼は、指先で鼻を抑えながら言った。

「確かに、そのままでは同衾もしたくはないな」

「だろー？ だから風呂入れて隅々まで洗ってくれよ」

「……それが人に頼む態度か？」

グレゴはロンクーに、所謂「お願い」をしている筈だ。しかし何をどう聞いても命令している様にしか聞こえず、ロンクーはそれにも不快そうに眉を顰めたがグレゴは鼻で笑った。「別に良いぜえ、このまま一晩添い寝してやっても」

「……少し待っている。湯を沸かしてくる」

飽くまで立場は自分の方が上であると言わんばかりの顔でせせら笑ったグレゴに、ロンクーは深い溜息を吐いて冷える廊下に面した扉を開く。久々に会えたのは確かに嬉しいのだがこの強烈なおいは耐えられなくて、早々に自室を後にしてしまつた。グレゴからは、死のおいがした。

勿論彼が死にゆく者であるという意味ではない。何か、もしくは誰かの遺骸と時を過ぎさなければこんなにおいしな

い。いくら涼しいフエリアであってもまだこの季節は遺骸の腐敗は進む為、彼がどこかで何か、誰かを殺してきたのはすぐに分かった。血のにおいは無く、ただ、死のにおいだけが強烈に鼻を刺激して、ロンクールの胸の奥から吐き気を湧き起こさせて足を湯殿へ向かわせたのだ。

肉の腐敗したにおいというのは本当に強烈で、服を洗っても中々取れるものでもないし、触れていた肉体にも移るものであるとロンクールは先の戦で経験した。そのにおいが暫くは鼻の奥に残り、不快さも暫く払拭されないという事だ。言われた通り隅々まで洗ってやると固く心に誓ったロンクールは苦い顔をしたまま湯を沸かす為に人通りの無い湯殿までの廊下を足早に進んだ。自分の部屋があのおいに侵食されてしまいう前に、あの男から死のにおいを剥がしてやる気だった。

湯殿番に申し付けるのも悪いと思っただけ湯を沸かし直す為に薪をくべて火を点け、湯殿の中を温める。火の側を離れる訳にもいかななくて暫くその場に居たが、寒かったのか退屈だったのかは知らないがいつの間にかグレゴが湯殿に隣接する脱衣所まで来ていた。あのまま部屋に居られたらにおいが部屋に籠って夜中なのに換気せざるを得なくなっていたらうから有難いと言えは有難いけれども、単に自分もその部屋で寝る——グレゴは今夜の様にいきなり訪れる時は勝手にロンクールの寝床で寝る——のだから夜中の換気が嫌だったのかも知れない。そういう男だ。

「……着替えを持ってきたか？」

「お前の衣類棚漁る程、デリカシーねえ男じゃねえぞ」

「……そうだな」

グレゴが着ている服をいくら洗ったところであの強烈なおいが消えるとは思えず、廃棄処分するしかないだろうと思っただけだが、着替えを持ってきて貰わねば部屋に戻るまでに風邪をひく。何から何まで世話の焼ける、と内心舌打ちしたロンクールだったが、何から何まで世話をしてしまっているのは自分であるという事に気が付いていない。全身洗ってやった後に湯船に浸からせている間に取に行けば良いという結論に達したロンクールがまだ温いがさつさと脱いで入れと服を脱ぎながら言うと、グレゴもにやると笑って服を脱ぎ始めた。

先に湯殿に入ったグレゴの体には相変わらず無数の傷が刻まれていて、新しく確認出来た傷もある。しかしその事に言及する気にもなれなくて、ロンクールは桶を片手に座れと言った。先に洗わねば折角の湯にもおいが移ってしまうと思っただからだ。グレゴはその指示に特に何の反発も無く素直にタイルの上に胡座をかいて座るとゆっくりと首を回し、関節が鳴る音が湯殿に響いた。

桶に湯を入れ、頭から被せる。寒い中に居たからなのかグレゴの大きな体がぶるつと震えたのが分かったが、いちいち配慮してられないので構わず石鹸を手に取り泡立て濡れた

頭髮に塗り込んで丁寧に洗い始めた。

頭や体を洗われているがままになっているし、自分で洗わずに他人に隅々まで洗って貰う事は彼にとって贅沢な事なのかも知れない。ロンクーは誰彼構わず触られるのは嫌いだが、グレゴは特に気にしていない様で、もう少し気にしろうと言ってもやらない。言ったところで全く聞き入れないだろうけれども。

入念に頭を二度洗って流し、取れたのかどうかは分からないが一応鼻を頭に近付けて確認すると石鹸の香りがした。なおいに鼻が慣れてしまい、石鹸の香りだけを都合よく判別しているだけかも知れないけれども、部屋を突然訪れてきた時より遥かにましだ。体を洗ったら香でも焚きしめるか、と、あまり馴染みがないものの存在さえロンクーに考えさせる程グレゴの衣類に染み付いた死臭は凄まじかった。体はどうかと首筋に鼻を寄せると、くぐもった笑い声が湯殿に響いた。  
「……何だ」

「いやー、犬みてえだなと思って」

「同じ寝台で寝るんだ、臭いまま添い寝されて堪るか」

「そりゃそーだ……」

頭やら体やらを嗅がれておかしかったのか、肩を震わせて笑うグレゴに眉根を寄せたが、理由を端的に述べれば同意された。背後に居るので顔は見えないけれども、普段と変わらぬ悪そうな笑みを口許に作っているのだろう。しかし首筋に

かかった自分の吐息にグレゴが僅かに反応したのを見てぎくりと自分の体が強張ったのを感じ、ロンクーは気取られない様にぎゅっと拳を握った。……まだ、欲情するには早い。

何でもないふりを装い、タオルに石鹸を塗り込んで泡立てる。それを綺麗に畳んで耳の裏から順に体を擦っていく。こうやって体をタオルで擦る行為はロンクーにとってはごく当たり前でもグレゴにとっては珍しいらしく、時折洗ってくれと頼まれる事がある。気持ちが良いらしい。自分でやれと言うと面倒臭えと返してくるどころかその代わりサーブスしてやるぜえと下から覗き込まれるとロンクーも断れないのだ。  
……腹立たしい事に。

背中を洗ってやってから前に回り込むと、視線が絡む。恐らく挑発しているのだろうがそれに乗らぬ様に無言で腕を寄せと手を出せば傷だらけの無骨で太い腕がずしりと乗せられた。指の股まで丹念に洗い、タオルを置いて爪の中まで洗ってやると、やはりおかしそうな低い笑い声が聞こえてきた。洗って貰っている癖にいちいち笑うなと言いたい気分だが、口で勝てた試しが無いので何も言わなかった。その代わりに腕を洗い終わって仕返したばかりに腋を洗うと、今度こそグレゴは声を上げて笑った。

「おいこら、くすぐってえぞ！」

「黙れ、さつきからいちいち笑ってくれた礼だ」

「犬みてえな癖に甲斐甲斐しく世話焼きやがると思っただけ、



「……文句を言う割には溢れたな」

「どの口が抜かしやがる、びんびんにおっ勃てやがって」

「ん……っ、」

抗議で口を尖らせたグレゴのペニスの先端を指の腹で撫でれば、石鹸ではなく滲み出した体液で滑りが良くなったのが分かる。ぐいと皮を完全に下ろし剥き出しになった亀頭をこね回すと、やられっ放しは癩なのだろう、グレゴが仕返しとばかりにロンクーが腰に巻いていたタオルを剥ぎ取って何の速慮も無くペニスを掴んできた。思わず腰が引けたが離れてはグレゴの思うつぼなので寧ろ体を近付けると、彼は挑発する様な目付きでぞろりと自分の唇を舐め、濡れた頭髮から滴り落ちる水もそのままに口付けが出来るすれすれまで顔を近づけると低い声で囁いた。

「滅茶苦茶に犯してみろよ。得意だろ、がつつくのはよお」

その声は湯殿だけではなくロンクーの耳にも強烈に響き、また脳髓まで侵された様な痺れが走り、グレゴの体を浴槽に押し付ける様にして再度口を塞いだ。結構な期間この男を抱いていなかったロンクーもそれなりに溜まっているし、個人的に一番扇情的だと思っている首筋を意図的に見せ付けられ、果てはそんな挑発までされては我慢出来る筈もなく、夢中で口を吸いながら膝立ちになったグレゴの尻に手を伸ばした。

「ふ、っん、んあ、ああつ、あつ、あつ……！」

「く……っ、うう、んん……っ」

肌がぶつかる音と嬌声と、どちらが大きいのかなどと気になる余裕はロンクーには無い。タイルの上で膝をついて四つん這いになり、突き上げに耐えようと浴槽の縁に手をかけ喘ぎ声を漏らしているグレゴがロンクーの腰の動きに合わせて尻を押し付けてくるので尚の事肌がぶつかる音が響く。男が性器を挿入されてここまで快感を得る様になるまで随分調教されなければならぬものらしいが、ロンクーが初めてグレゴと体の関係を持った時には既にこんな風に突き上げられて善がっていたからこの男の体を「女」にした者が存在するという事は分かった。

「っんん、んあ、あ、善い……っ、い、あひっ……！」

「……いつも、より、随分……、興奮、してないか……っ？」

「はあ、ああ、そ、そりや、……あはっ……、死体に、囲まれて、丸一日氣イ失ってた、から、なっ……」

「な……っ？」

その事実にはいちいち腹を立てても仕方ないのだが、それでも忌々しく、眼下でいつも以上に善がるグレゴの背に押し掛かつてペニスを握れば、風呂場だからではない湿りがロンクー

の掌をべったりと濡らした。しかしグレゴの回答の前にそれは些細な事となり、思わず腰の動きが止まる。なるほど、それで死臭があんなに染み付いていたらしいが、それにしても一日気を失っていたとは何だ。

「まーだ、屍兵が、多いって……こった……」

「……お前が不覚を取るとは珍しい、な」

「はあ、ああ、ぜ、全員死んだ、村の、掃除して、たら、不意打ち食らって、な……っ」

「……そうか」

仕事であったのかたまたま通りがかったのか、それはロンクーには分かりかねたが、被害の報告が少なくなつたとは言えまだ各地での屍兵による破壊活動の中で襲われた村を見て、そういう部分はお人好しのグレゴは埋葬だけでもやろうとしていたのだろう。その時に不意を突かれ襲われたに違いない。幸いにも命に別状は無く、気を失っただけでとどめをさされなかつた彼は、村人の死体に囲まれて一日過ごしたという事らしい。

本当に普段のグレゴを考えれば珍しい失態ではあるが、情に厚い側面も持つこの男の事だ、村の犠牲者の中には子供供も多く含まれていたのだろう。ひよっとしたら大人が一所に子供だけを隠し、その場所が襲撃されて子供だけの遺体が集まっていたのかも知れない。戦時中も時折そんな光景を見て顔を歪めていた彼を思い出せば、その可能性は十二分に有

り得た。

そして、大体そういう事があつた後は酒をしこたま飲んで花街に女を買に行ったり、ロンクーをけしかけて抱かれたりした。酒やセックスの快感に逃げたと言えばそうだが、逃げなければ正気を保てなかつたに違いない。ロンクーもそういう光景を見た後は眠れず、一晚中剣を振つたりしたものだった。

「んあ、あ、っは、そ、そこ、そこ……っ」

「う……っく、うう……っ」

あまりしつこく聞く事でもなからうと判断して腰の振りを再開させれば体勢からして奥まで当たるのか、最奥を突いてくる様に要求されたので突くと、 Tail に膝立ちで痛いだろうにそんな事など構う素振りも見せずグレゴは浴槽にしがみついて背後からぶつけられる快感に悶えた。体を濡らしているのは濯いだ湯なのか汗なのか、ペニスを包む溶けそうな熱の快感の前では最早どちらでも構わない。

「いっ……!! 痛えだろうがこの馬鹿!!」

「痛いだけか?」

「はあっ! あ……っ!」

そして視界に入った無防備に晒された項に思い切り噛み付けば案の定文句を言われたが、すかさずグレゴのペニスに手を伸ばすと溢れかけた先走りが手を汚した。それと同時に孔が締まり、腰の辺りがぞくりと戦慄く。だがその刺激だけで

は足らなかつたのか、グレゴもベニスに手を伸ばして自分で乱暴に扱き始めた。どうやら随分溜まっていらしい。手の動きに併せて収縮する内部の圧がどんどん強まり、痛みさえ感じる様になつてきたが、その痛みも強烈な快感に変わった。

「ああ、あ、出る……っ！」

「は、あああつ、あつ、あつ……！」

そして限界を迎え、いくら風呂場であつても体内に出す事は躊躇われたので一気に引き抜き、細かく痙攣しているグレゴの尻の上に勢い良く射精した。一滴も出しそびれない様に根本から扱いて擦り付けると、白濁し粘度のある精液がその場に留まる。グレゴも達した様で、肩で大きく息をしながらずるりと浴槽の縁から床に崩れた。顔を見せない辺り、随分と善かつたのだろう。彼が終わつた後に顔を見せない時は、大体快感の余韻に浸っている時だ。

結局風呂場で事に及んでしまった、と射精した後の冷えた頭で思いながら、風邪をひかせても面倒なので浴槽からぬるくなつた湯を桶で汲み上げて、横たわつたグレゴの大きな体にゆっくりとかけてやる。かかつた瞬間にびく、と跳ねたのは驚いたのか、それとも敏感になつた肌に刺激が強かつたのか、そこはロンクーには分かりかねた。

湯槽の湯は既に温く、到底体を温めてくれそうにない。浸かつても徒に体を冷やすだけだろう。汗を流す程度にして早く部屋に戻つた方が良さそうだ、そう考えたロンクーはタイ

ルに伏せたままのグレゴの体を起こそうと手を伸ばしたのだが、その瞬間手を捕まれたどころか支えにして起き上がったグレゴから思い切り床に叩き付けられた。強かに打つた背中と後頭部に走つた激痛に顔を歪めたロンクーは、しかし腹部に感じた重みに辛うじてうすすらと目を開け、自分の上に乗つたグレゴを睨み付けた。

「……痛いだろう、何をやる」

「んー？ 洗つてくれた札を弾んでやろうと思つてな」

「な、ん………うあつ?!」

相変わらず見下した様な目付きで自分を見たグレゴの口許は珍しく性欲で歪んでおり、分厚い舌がぞろりと彼の下唇をなぞつたかと思えば突然下半身を襲つた痛みにも似た快感にロンクーは短い悲鳴を上げた。射精したとはいえそれなりに溜まっていたせいでベニスはまだ萎えておらず、故に握られ亀頭を指で捏ねられてはすぐに勃起してしまう。ロンクーのその反応を褒める様に、グレゴは腰を浮かせた。

「若えから出してもおつ勃つのが早えなあ。もうちよーつと遊ぼうぜ」

「………つあああ！」

にやりと笑つたグレゴの言葉が終わる前に射精した直後の敏感になつたベニスはいとも簡単にグレゴの内部に埋まり、ロンクーはまた悲鳴の様な嬌声を上げた。グレゴが上に乗つて腰を振る事は珍しく、それだけ溜まっているのかはたまた

置かれていた状況を忘れたのか、とにかく性の陶醉に浸りたい様に見えた。そういう弱味を微塵も見せずにこちらを馬鹿にした様に見下して腰を振るのが気に入らないとロンクーは思ったが、押し退けられない程度に彼は若かった。目先の快感に、溺れてしまった。

「っあ、あ、ううっ……」

「ああ、は、つくく、ガッチガチじゃねえか、おい」

「萎えてた、方が、良いか……っ？」

「んー？ それはそれで馬鹿に出来るよなー」

「いつも、馬鹿に、している癖に……っ」

体内に埋め込まれたロンクーのペニスが先程射精したばかりであるとは思えない程の硬さであった事を笑ったグレゴは反論したロンクーの顎を指先で褒める様に撫でる。僅かに髭が生えたその顎を逆る指先はまるで愛撫を与えている様で、ぞわりと這う微弱な電流はタイルに押し潰されている背中の痛みを徐々に大きなものにしていく。亀頭の先端をもっと肉壁にぶつけたたくて腰を突き上げると、グレゴが大きく背を反らせて蕩ける様な声をあげた。突くと脳天まで快感も突き上げられるのだろう。

「ひっ……ん、ああ、あ、あつ、そ、それ、ああ、もつと、」

腰が上下する度に揺れるグレゴのペニスを掴んで乱暴に抜くと、彼は抜く手の動きに合わせてまた腰をくねらせる。掌にペニスを擦り付ける様に腰を動かすグレゴは当たり前の様

に自分の事など見ておらず、それはいつもの事なのだが矢張りロンクーにとっては面白くはない。腹いせに亀頭の割れ目を指の腹で強く擦ると、グレゴが悲鳴の様な喘ぎを上げたかと思えばぎゅうと孔を締め付けてきたので、思わず呻き声を上げてしまったロンクーが背を反らせた。ペニス全体で内壁の圧や熱の感触を余すことなく堪能すると肩甲骨を圧迫するタイルで滑る肌が打ち付けられ、痛みが背中全体に走る。いっ加減体が痛い顔と顔を響めたロンクーは、渾身の力を振り絞って上体を起こした。

「うお……っ、と、おい、だーれが起き上がって、良いって、言った……っ」

「許可など、出す、つもり、無いだろうが……っ！」

「はあつ、何だあ、恋人気取りしてえってかあ……っ？」

グレゴの背に手を回して起き上がったものだから彼を抱き締める様な体勢になってしまい、それが嫌だったのかグレゴが嫌そうに肩根を寄せる。そういうつもりではなかったが、嫌そうな顔でさえ背筋をぞわりと震わせてしまったので、俺もヤキが回ったかとロンクーは荒い息を吐く口で乱暴にグレゴの口を塞ぎながら思った。

「ぶぐ、うう、う、うつ、んぶ、ぶあ、あああ」

「いっ……！ どさくさに紛れて背中を引つ掻くな！」

「嬉しい、だろうが、所有印だぜえ……っ？」

「随分と、乱雑な所有印……だな……っ」



突然背中に爪を立てられたかと思えば皮膚を割く様に引つ掻かれ、ロンクーが思わず文句を言うのと、グレゴは全く悪びれもせず鼻で嘲笑う様に言い返してきた。何が所有印だ、とロンクーは忌々しげに舌打ちしたものの、鼻を掠つた程度で一気に不快感を増大させてしまった。引つ掻かれた程度であるならほんの僅かな出血であろうに、ロンクーの鼻にはグレゴが自室に入ってきた時と同じ様なにおいを感知したのだ。「あはあつ！ あひ、ひい……っ」

グレゴの首筋に顔を埋め、それによって与えてしまったのであろう愛撫で体を捻りながら悶えたグレゴをよそに、ロンクーはそこでおいを確認する。腕を洗っている最中で行為に及んでしまった為に全てのおいが取れたとは思えないがそれにしてもあの強烈な不快感はいただけない。グレゴにそのにおいが染み付いているのか、勝手に死人になろうとしている様に思えてこの上なく不愉快だ。

「ほんっ……と、お前、犬、みてえだな……っ」

「何とでも、言えっ！」

「ひっ……ぎ、いあ……っ!!」

おいを嗅いだせいでまた犬と言われ、開き直って怒鳴りながら腰を動かし奥まで突くと反らせたグレゴの喉笛が露わになる。汗で濡れたそこは甘美なものとしてロンクーの目に映り、彼は思わず噛み付いてしまった。歯に伝わる鼓動は速く、グレゴが紛れも無く生きているという事をダイレクトに

教えてくれる。あまり深く噛み付いてしまうと喉笛を食い干切ってしまうから、離れる代わりに激しく突き上げた。

「あああ、い、善い、ああ、も、もっと、もっとくれっ、奥、奥までもっと……っ!」

「ここ、は、扱かなくて、良いのかっ……?」

「そ、そこも、ああ、善い、い、いく、逝く、あ、も、」

「待、て、俺も、俺も出る、抜くから退け、離せ、……っくあああつ！ あつ、あつ……!!」

「んあああつ……!!」

突き上げと手の扱きで得た快感で齧された限界を口にされ、自分も射精しそうであったロンクーがグレゴの体を退かそうと試みたものの、彼は何を思ったのか抜こうとしなかったどころか足をロンクーの腰に絡みつけて離さなかった。普段は体内に射精する事を嫌がる癖に、とどこか冷静な頭の片隅で思ったものの、射精の余韻に体を痙攣させて浴槽に体を預けたグレゴからペニスを引き抜き大丈夫かどうかを確認する様に顔を覗きこむと、彼は薄目でロンクーを見上げながら口許をにたりと歪めた。

「よお、これで風呂代と寝床代は十分だろ……とつと寝台に連れて行ってくれ」

半分虚ろなその目は、しかししっかりと生きた者の光が宿る。あの不快なおいはどこかへ行ってしまった様だが、それでもロンクーは背に走った悪寒に苦い顔しか出来なかった。

「つくしゅー！」

「ぶへつくしゅー！」

殺風景な部屋に響く盛大なくしゃみは、暖炉で薪が燃える音にかき消されはしない。背中を走った悪寒に体を震わせたロンクーは額を冷やすタオルごと頭をおさえた。

「まー……あーんなどこでセックスすりゃ風邪ひくって話だよな……」

「途中でちゃんと戻ろうとしたぞ、俺は……」

「なーんだよ、めいっばい中出しした癖によく言うぜ」

「あれはお前が…… ……いや、今はそんな事は良い、お互い大人しく寝るぞ」

「んー……」

隣で気怠げに体を起こして水を飲んだグレゴが不服を述べたが、ロンクーの言葉に力なく頷いてまた寝台に体を沈める。どっちも単なる風邪だから面倒臭いしお前ら一緒に寝てろとやや乱暴な論理で別々の寝台を用意されなかった為に二人は同じ寝台に横になつているが、そこそこ大きな寝台であるから余裕はある。それでも別々の寝台が良かったというのが二人の本音だ。しかし面倒臭いから一緒に寝てろと言われて二人が何の抗議も出来なかったのは言ったのがバジャーリオだった

たからである。恐らく彼は二人がどこで何をやったのかは察したのだろうが、興味が無いのか深く追求せず呆れた顔をしただけだった。

億劫そうにごろりと背を向けたグレゴの後頭部をぼんやりと見る。風邪のせいで鼻が詰まっているとは言え、もうあの死臭はにおつてこない。そうだ、この男はまだ生きている。死臭を剥がし、快感を与えて、この世に引き戻した。そう思つて何となく溜飲を下げたロンクーは、同じ様に背を向けて目を閉じた。つけられた所有印である背中の傷は、もうとっくに跡形も無くなつてしまつていた。